

歩行サーベイによる生活経路における空間線量率の測定

山本 英明、斎藤 公明（原子力機構）

1. 調査目的

福島第一原発から放出された放射性セシウムの環境中における 2 次元的な分布状況を詳細に調査し、この結果を空間線量率分布の統合マップ作成や詳細解析に役立てるため、KURAMA-II システムを背負って歩行しながら空間線量率を測定する。

平成 24 年度までの調査結果から、走行サーベイにより測定した道路上の空間線量率の経時的な減少傾向は、人為的なかく乱の少ない平坦な開かれた土地においてサーベイメータで測定した空間線量率（平坦地上定点における空間線量率）の減少傾向に比べて顕著に大きいことが明らかになっているが、人間が生活する環境の空間線量率は、走行サーベイの測定値あるいは平坦地上定点における測定値のどちらにより近いのかを検討することを目的とし、平成 25 年度から調査を開始した。

様々な土地利用状況が混在する、平坦地と道路の間の地域においては、その状況に応じて空間線量率が様々に変化するため、自動車が走行できない地域も含めて広範囲の測定が可能な歩行サーベイにより走行サーベイや平坦地上定点における測定結果を補完して、生活経路における空間線量率分布の特徴を明らかにすることを目指した。

2. 調査内容

(1) 調査期間

前期調査：平成 28 年 6 月 29 日～8 月 5 日

後期調査：平成 28 年 10 月 27 日～12 月 13 日

(2) 調査地域

福島第一原発から 80 km 圏内の地域を 1 km×1 km に分割したメッシュで、走行サーベイの測定ルートが含まれていて平坦地上定点の空間線量率の測定が行われているものの中から、土地利用状況、空間線量率範囲、地域の代表性を考慮して調査対象のメッシュ（調査箇所）を選んだ。調査箇所数は 539 箇所であった。また、非可住区域の森林（ALOS 土地利用分類で落葉樹又は常緑樹に分類されている場所）10 箇所を測定を行った。（図-1）

(3) 調査内容の詳細

KURAMA-II システムとバッテリーを測定者が背負い、歩きながら 3 秒毎に測定した空間線量率データと GPS による位置情報を、携帯電話回線を通してデータ収集用サーバに 30 秒毎に転送した。測定者が KURAMA-II システムを背負うことにより、空間線量率の測定高さは概ね地上 1 m 高さになる。（図-2）

現在の空間線量率への寄与の大部分が放射性セシウムによるものであり、測定期間中の放射性セシウムの物理減衰に伴う空間線量率の減少は 1%程度と評価され測定機器の有する誤差よりも低いことを考慮して、空間線量率測定値を一定の日付に揃える減衰補正を行わず、測定した日の測定結果をそのまま使用した。また、測定値の統計的なばらつきを低減させると同時に、空間線量率の 2 次元的な分布が詳細に把握できるように、歩行地域を 20 m 四方のメッシュに分割し、そのメッシュ内に含まれる各測定箇所での空間線量率の値を平均してメッシュの代表値とした。

3. 結果と考察

歩行サーベイにおいては、自動車の入り込めない住宅周辺や樹木の間、田畑の周辺などの場所、人の往来、清掃、農耕などの生活・産業活動の行われる場所において測定を行った。したがって、歩行サーベイによる空間線量率の測定は住民が生活時間の多くを費やす生活環境における空間線量率の様態に比較的近いと考えられる。このことを前提に、走行サーベイによる空間線量率の測定結果または平坦地上定点の空間線量率の測定結果と歩行サーベイによる測定結果とを比較して、これら3者の関係を把握し、生活環境における空間線量率推定のための基礎となる情報を得た。

(1) 走行サーベイの測定結果と歩行サーベイの測定結果との比較

道路上の空間線量率と歩行サーベイを行った場所の空間線量率の関係を調べるために、走行サーベイの測定結果と歩行サーベイの測定結果とを比較した。走行サーベイの測定結果を平均する100mメッシュと、歩行サーベイの測定結果を平均する20mメッシュとが重なる場合にそれらの空間線量率を比較した。該当する20mメッシュのデータ数は、前期調査時は $n=102,705$ 、後期調査時は $n=90,996$ であった。なお、走行サーベイの結果は車外の地上1mの値に換算した値である。

① 相関図・回帰直線による比較

歩行サーベイと、同じ時期に行われた走行サーベイの空間線量率の比較対象データ間の相関図を作成し、回帰直線の比較を行った。比較対象データ数の95%以上は $1.0 \mu\text{Sv/h}$ 以下であったので、 $1.0 \mu\text{Sv/h}$ 以下のデータのみでも相関図を作成した。測定されたすべての線量率領域及び $1.0 \mu\text{Sv/h}$ 以下の線量率領域の相関図を図-3に示す。なお、自然放射線の寄与（バックグラウンド）は含んでいる。測定されたすべての線量率領域で比較すると、歩行サーベイでは、走行サーベイの値に対して回帰直線の傾きによる比較で1.05倍大きい値を示すことがわかる。一方、 $1.0 \mu\text{Sv/h}$ 以下の線量率領域での比較では1.23倍となった。

調査箇所が、原子力災害対策本部が設定した避難指示区域（避難指示解除準備区域、居住制限区域及び帰還困難区域）の内側に位置するか、あるいは、外側に位置するかによる回帰直線の傾きの特徴を解析した。なお、避難指示区域内外の分類は、平成27年9月5日時点のものを使う。表-1に示すように、全線量率域では避難指示区域内では回帰直線の傾きが避難指示区域外よりも10%程度小さくなっており、避難指示区域内のほうが、道路上と周囲との空間線量率の差が小さいことがわかる。

また、前期調査及び後期調査について比較した。表-1に示すように、回帰直線の傾きは前期・後期ではほとんど差がない。

同様に、土地利用状況ごとの測定結果について、測定値の点数として約1,000点を超えるものが得られた土地利用状況（「水域」と「裸地」以外）のデータを対象に比較した。ここでは避難指示区域の内外を区別せずに比較を行った。前期調査及び後期調査について、全線量率領域と $1.0 \mu\text{Sv/h}$ 以下の線量率領域での相関の回帰直線の傾きを図-4に示す。回帰直線の傾きは、都市以外の地域では全般に、 $1.0 \mu\text{Sv/h}$ 以下の線量率領域では全体に比べて回帰直線の傾きが大きい、すなわち道路上と周囲の空間線量率の差が大きい傾向が見られた。また、全線量率領域と $1.0 \mu\text{Sv/h}$ 以下の線量率領域での相関の回帰直線の傾きの大きさの差は後期では前期に比べて顕著に小さくなった。

② 合計線量率による比較

空間線量率の歩行サーベイによる測定値の合計値（以下「合計線量率」という。）と走

行サーベイによる合計線量率の比率（以下「合計線量率比」という。）による比較を行った。合計線量率は測定数で割れば平均線量率になるため、今回のように測定箇所数で比較する場合においては、合計線量率比は平均線量率の比率と同じである。解析の例として、測定されたすべての線量率領域についての合計線量率の比較結果を図-3 の上部に示す。歩行サーベイと走行サーベイの合計線量率比は 1.17 であり、全地域に対する回帰直線の傾き 1.05 と $1.0 \mu\text{Sv/h}$ 以下の線量率域に対する回帰直線の傾き 1.23 の中間の値を示した。

表-2 に示すように、避難指示区域内外の差異に関しては、避難指示区域に含まれる調査箇所の合計線量率の比率の方が区域外に係る比率より小さく、避難指示区域内外どちらも後期調査の比率が前期調査の比率より大きかった。

③ 測定値の比率の頻度分布による比較

走行サーベイの測定結果に対する歩行サーベイの測定結果の空間線量率比の頻度分布を解析した。累積頻度は走行サーベイの測定値に対する歩行サーベイの測定値の比率の分布を低い方から積分した分布であり、比率がどのようにばらついているかを定量的に理解するための指標となる。比率の中央値（50%）に対するばらつきの程度を解析するために、累積頻度の割合が 10% 及び 90% となる比率も求め、その結果を表-3 に示す。また、表-3 には避難指示区域内外の差異に関する解析結果も示した。

走行サーベイに対する歩行サーベイの空間線量率比の頻度分布を見ると、たとえば前期の避難指示区域内での測定では、10%値が 0.69、90%値が 2.06 と広い分布を示しており、走行サーベイの 100 m メッシュ内でも場所により空間線量率が大きく変動していることが確認された。また、どのケースについても、比率の中央値は合計線量率比に近い値となった。すなわち、避難指示区域内では前期測定が 1.17、後期測定が 1.14、避難指示区域外では前期測定が 1.22、後期測定が 1.28 となった。

土地利用状況の区分ごとの差異に関しては、約 1,000 点を超える測定値が得られた土地利用区分（「水域」と「裸地」以外）について解析した。前期調査及び後期調査について得られた累積頻度の割合が 10%、50% 及び 90% となる歩行サーベイ／走行サーベイの比率を表-4 に示す。土地利用状況による差は大きくないが、「落葉樹」と「常緑樹」に区分される土地利用状況では他の土地利用状況に比べて低い比率を示す傾向が見られた。

(2) 平坦地上定点の空間線量率測定結果と歩行サーベイの測定結果との比較

擾乱のない平坦地と生活環境とにおける空間線量率の間の関係を把握するため、平坦地上定点の空間線量率測定結果と歩行サーベイの測定結果とを比較した。擾乱のない平坦地からの離隔距離が大きいほど、環境への人間の生活行動の影響が大きい可能性を想定して、定点測定箇所との間の距離が 20 m 以内、100 m 以内及び 200 m 以内を歩行サーベイして得られた空間線量率測定値と定点における測定値とを比較した。この比較においては、土地利用状況区分や避難指示区域内外による解析を行うのには十分なデータ数が得られていないので、これらの区分によらない解析のみを行った。

① 相関図・回帰直線による比較

平坦地上定点の空間線量率の測定結果と、同じ時期に行われた歩行サーベイの測定結果の相関図を作成し比較した。定点測定箇所との間の距離が 20 m 以内、100 m 以内及び 200 m 以内となる歩行サーベイの 20 m メッシュの平均空間線量率を平坦地上定点測定の空間線量率測定値と比較した。比較対象データ数の約 90% 以上は $1.0 \mu\text{Sv/h}$ 以下であったので、 $1.0 \mu\text{Sv/h}$ 以下のデータのみでも相関図を作成した。相関図の例として、図-5

に定点測定箇所との間の距離が 20 m 以内のものを示す。

表-5 に示すように、全線量率領域での回帰直線の傾きは、平坦地上定点測定の箇所との間の距離が 20 m 以内では 0.64、100 m 以内では 0.64、200 m 以内では 0.62 となった。一方、 $1.0 \mu\text{Sv/h}$ 以下の線量率領域では、回帰直線の傾きは、距離が 20 m 以内では 0.82、100 m 以内では 0.87、200 m 以内では 0.89 となった。距離の異なる (20m、100m、200m) 比較範囲による差はあまりなかった。

② 合計線量率による比較

平坦地上定点測定と歩行サーベイによる合計線量率を比較した。平坦地上定点測定箇所との間の距離が 20 m 以内、100 m 以内及び 200 m 以内となる歩行サーベイの 20 m メッシュの合計線量率を平坦地上定点測定の合計線量率と比較した。

表-5 に示すように、合計線量率比 (歩行サーベイ/平坦地上定点測定) は、最小 0.71、最大 0.76 となった。

(3) 走行サーベイ、平坦地上定点、歩行サーベイによる空間線量率の測定結果の比較

表-1、表-2 及び表-3 (累積頻度の中央値) に示すように、歩行サーベイによる生活経路の空間線量率測定値と走行サーベイによる道路上の空間線量率測定値の比 (歩行サーベイ/走行サーベイ) は、比較方法により 1.0 から 1.3 程度となった。また、表-5 に示すように、平坦地上定点において行ったサーベイメータによる空間線量率測定値との比 (歩行サーベイ/平坦地上定点測定) は、比較方法により 0.6 から 0.9 程度となった。

(4) 経時変化

平成 25 年度からの経時変化として、歩行サーベイによる空間線量率の測定結果の経時変化、走行サーベイと歩行サーベイの関係の経時変化、及び平坦地上定点の空間線量率測定と歩行サーベイの関係の経時変化について調べた。

なお、平成 25 年度と平成 26 年度以降では歩行サーベイの測定地点数に違いがあるので、これを表-6 にまとめる。

① 歩行サーベイによる空間線量率の測定結果の経時変化

平成 25 年度から 8 回実施した歩行サーベイの調査結果を基に、空間線量率の経時変化を調査した。8 回を通じて測定を行った 114 箇所における合計線量率を計算し、平成 25 年 6 月調査の値に対する比を計算した。平成 25 年 6 月の調査から平成 28 年 12 月の調査まで、約 42 ヶ月が経過する間に、歩行サーベイを行った場所の空間線量率は、平成 25 年 6 月に比べて 40%程度に減衰した。この間、放射性セシウムの物理減衰によって空間線量率は約 55%になると計算されるので、物理減衰よりも速い空間線量率の減少が観測された。平成 28 年度は合計線量率値の数値が前期に比べて後期でわずかな増加が見られたが、KURAMA システムによる測定の不確かさが $\pm 10\%$ 強あることから有意な差ではないと判断できる。(図-6)。

② 走行サーベイとの関係の経時変化

表-7 に、合計線量率比 (歩行サーベイ/走行サーベイ) を示す。避難指示区域内で 1.02 ~ 1.16、避難指示区域外で 1.14 ~ 1.33 となった。

表-8 に、走行サーベイの測定結果に対する歩行サーベイの測定結果の比率の頻度分布を解析した結果を示す。表中の値は、累積頻度の中央値 (50%) となる比率で、避難指示区域内で 1.07 ~ 1.22、避難指示区域外で 1.11 ~ 1.28 となった。

平成 26 年度以降、歩行サーベイと走行サーベイの空間線量率比に経時変化はあまり見られず、両者の空間線量率の減少率はほぼ同じと考えられる。

③ 平坦地上定点の空間線量率測定との関係の経時変化

表-9 に、合計線量率比（歩行サーベイ／平坦地上定点測定）を示す。

歩行サーベイと平坦地上定点測定との空間線量率比の経時変化から、平成 25 年度以降、歩行サーベイの空間線量率が平坦地定点測定との空間線量率に比べて少し速く減少する傾向がうかがえる。

(5) 非可住区域の森林の空間線量率の測定結果

走行サーベイと平坦地上定点測定を実施していない区画 10 箇所を歩行サーベイを実施した。これらは全て ALOS 土地利用分類で落葉樹又は常緑樹に分類されており、以下、この 10 箇所を「非可住区域の森林」という。歩行したのは主に林道である。空間線量率測定結果を平成 27 年度と平成 28 年度とで比較した結果を表-10 に示す。表-10 には併せて、同じ時期に歩行サーベイを実施した 27,525 メッシュ（20m メッシュ）のデータも示した。これらのメッシュは、ALOS 土地利用分類で落葉樹又は常緑樹に分類されている箇所（以下「可住区域の森林」という。）である。両年度の比較は、両年度の空間線量率測定値の相関図における回帰直線の傾きによる比較と、両年度の合計線量率の比を計算することによる比較の 2 種類の方法で行った。相関図は全空間線量率域と 1.0 μ Sv/h 以下の空間線量率域の 2 種類について作成した。

非可住区域の森林の空間線量率の年度比は約 0.81 であり、物理的半減期による空間線量率の減衰の年度比 0.87 より若干小さな値となった。また、可住区域の森林では年度比はさらに小さく約 0.73 であり、非可住区域の森林よりも空間線量率はやや早い減衰を示した。

4. まとめ

福島第一原発から 80 km 圏内を中心に平成 28 年 6 月から 8 月及び 10 月から 12 月の 2 回にわたり KURAMA-II システムを用いて空間線量率の測定を行い、生活経路における空間線量率分布の特徴を検討した。

本調査全体を通じては、3 つの異なる手法でそれぞれ異なる環境の空間線量率を測定している。サーベイメータでは人為的なく乱の少ない平坦な開かれた土地（平坦地上定点）において、また、走行サーベイでは道路上の空間線量率を測定した。これら 2 つの測定環境の近傍で行った歩行サーベイは、生活経路に沿ったものであり、平坦地上定点や道路上の測定値よりも住民の生活環境における空間線量率をより良く代表していると考えられる。3 つの測定方法による広域で平均した空間線量率測定値の大小関係は、大きい順に、平坦地上定点測定、歩行サーベイ、走行サーベイとなった。歩行サーベイの空間線量率測定値と走行サーベイによる道路上の空間線量率測定値との比（歩行サーベイ／走行サーベイ）は、比較方法により 1.0 から 1.3 程度となった。また、平坦地上定点において行ったサーベイメータによる空間線量率測定値との比（歩行サーベイ／平坦地上定点測定）は、0.6 から 0.9 程度となった。それぞれ異なる手法によって得られた測定値による比較であり、統計的な観点からの考察が必要ではあるが、これまでのところ、これらの比率から見て、歩行サーベイ結果、すなわち生活環境における空間線量率は、走行サーベイ結果より最大およそ 30%大きく、また、平坦地上定点測定結果より最大およそ 40%小さいとの結果が得られた。ここでは、歩行サーベイ（生活環境）、走行サーベイ（道路上）、平坦地上定点（未擾乱環境）の間の空間線量率の差異の最大幅を把握する意図で、空間線量率測定値の差の最大値を記載した。

平成 25 年度からの測定結果との比較により空間線量率の経時変化の特徴を調べた。平成 25 年 6 月の調査から平成 28 年 12 月の調査までの約 42 ヶ月間に、歩行サーベイを行った場所の空間線量率は、平成 25 年 6 月に比べて 40%程度に減少し、放射性セシウムの物理減衰よりも速い空間線量率の減少が観測された。

表-1 空間線量率回帰直線の傾き（歩行サーベイ／走行サーベイ）

区域	避難指示区域内			避難指示区域外		
	全期間 (n=22,604)	前期 (n=10,709)	後期 (n=11,895)	全期間 (n=171,097)	前期 (n=91,996)	後期 (n=79,071)
全線量率域	1.05	0.99	1.10	1.21	1.19	1.23
1.0 μ Sv/h 以下の線量 率領域	1.25	1.31	1.19	1.21	1.19	1.23

表-2 合計線量率比（歩行サーベイ／走行サーベイ）

区域	避難指示区域内		避難指示区域外	
	前期 (n=10,709)	後期 (n=11,895)	前期 (n=91,996)	後期 (n=79,071)
合計線量率比	1.07	1.15	1.24	1.31

表-3 空間線量率測定値の比率の頻度分布（歩行サーベイ／走行サーベイの頻度分布）

累積頻度	避難指示区域内		避難指示区域外	
	前期	後期	前期	後期
10%	0.69	0.84	0.84	0.88
50%	1.17	1.14	1.22	1.28
90%	2.06	1.70	1.89	1.98

表-4 土地利用状況ごとの空間線量率測定値の比率の頻度分布
(歩行サーベイ／走行サーベイ)

<前期調査>

累積 頻度	全体 (n=102,705)	都市 (n=30,760)	水田 (n=26,551)	畑地 (n=20,647)	草地 (n=4,346)	落葉樹 (n=13,158)	常緑樹 (n=6,327)
10%	0.82	0.81	0.84	0.83	0.83	0.79	0.81
50%	1.21	1.23	1.24	1.21	1.21	1.14	1.16
90%	1.90	1.93	1.98	1.88	1.89	1.72	1.75

<後期調査>

累積 頻度	全体 (n=90,996)	都市 (n=31,616)	水田 (n=21,648)	畑地 (n=17,319)	草地 (n=3,560)	落葉樹 (n=10,334)	常緑樹 (n=5,591)
10%	0.87	0.85	0.89	0.89	0.90	0.87	0.86
50%	1.26	1.27	1.30	1.27	1.25	1.20	1.17
90%	1.94	1.99	2.00	1.95	1.87	1.77	1.70

表-5 歩行サーベイ／平坦地上定点測定 of 空間線量率の比率

比較の方法		定点から 20 m 以内の歩行	定点から 100 m 以内の歩行	定点から 200 m 以内の歩行
①相関図 ・ 回帰直線	全線量率域	0.64	0.64	0.62
	1.0 μ Sv/h 以下	0.82	0.87	0.89
②合計線量率の比率		0.71	0.76	0.76

表-6 歩行サーベイの測定箇所の数（1 km メッシュ）

	平成 25 年度		平成 26～28 年度	
	前期	後期	前期	後期
避難指示区域内	4	4	68	68
避難指示区域外	257	257	471	471
合計	261	261	539	539

※ 平成 25 年度前期から平成 27 年度後期までの共通の測定箇所数は、避難指示区域内が 4 箇所、避難指示区域外が 137 箇所。平成 26 年度前期から平成 28 年度後期までの 539 箇所は全て同じ箇所。

表-7 合計線量率比（歩行サーベイ／走行サーベイ）

	平成 25 年度		平成 26 年度		平成 27 年度	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期
避難指示 区域内	1.16 (n=722)	1.02 (n=601)	1.07 (n=10,894)	1.14 (n=8,410)	1.08 (n=9,489)	1.16 (n=10,189)
避難指示 区域外	1.33 (n=61,806)	1.28 (n=66,522)	1.19 (n=101,062)	1.30 (n=108,429)	1.14 (n=90,050)	1.26 (n=76,202)
	平成 28 年度					
	前期	後期				
避難指示 区域内	1.07 (n=10,709)	1.15 (n=11,895)				
避難指示 区域外	1.24 (n=91,996)	1.31 (n=79,071)				

※ n：歩行サーベイ 20m メッシュのデータ数

表-8 空間線量率測定値の比率（歩行サーベイ／走行サーベイの累積頻度 50%）

	平成 25 年度		平成 26 年度		平成 27 年度	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期
避難指示 区域内	1.22 (n=722)	1.09 (n=601)	1.07 (n=10,894)	1.15 (n=8,410)	1.09 (n=9,489)	1.19 (n=10,189)
避難指示 区域外	1.27 (n=61,806)	1.24 (n=66,522)	1.18 (n=101,062)	1.26 (n=108,429)	1.11 (n=90,050)	1.24 (n=76,202)
	平成 28 年度					
	前期	後期				
避難指示 区域内	1.17 (n=10,709)	1.14 (n=11,895)				
避難指示 区域外	1.22 (n=91,996)	1.28 (n=79,071)				

※ n：歩行サーベイ 20 m メッシュのデータ数

表-9 合計線量率比（歩行サーベイ／平坦地上定点測定）

	平成 25 年度		平成 26 年度		平成 27 年度	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期
定点から 20 m 以内	0.86 (n=234)	0.88 (n=262)	0.80 (n=784)	0.77 (n=784)	0.72 (n=842)	
定点から 100 m 以内	0.89 (n=343)	0.89 (n=405)	0.80 (n=1,163)	0.79 (n=1,145)	0.73 (n=1,254)	
定点から 200 m 以内	0.93 (n=422)	0.91 (n=479)	0.82 (n=1,267)	0.82 (n=1,263)	0.74 (n=1,336)	
	平成 28 年度					
	前期	後期				
定点から 20 m 以内	0.71 (n=843)					
定点から 100 m 以内	0.76 (n=1,263)					
定点から 200 m 以内	0.76 (n=1,347)					

※ n：歩行サーベイ 20 m メッシュのデータ数

表-10 森林（落葉樹又は常緑樹）の歩行サーベイによる空間線量率測定結果
（平成 27 年度／平成 28 年度）

単位： $\mu\text{Sv/h}$

		非可住区域の森林 (n=1,377)	可住区域の森林 (n=27,525)
相関図 ・ 回帰直線	全空間線量率域	0.81	0.71
	1.0 $\mu\text{Sv/h}$ 以下の空間線量率域	0.80	0.75
合計線量率比		0.81	0.74

※ n：歩行サーベイ 20 m メッシュのデータ数

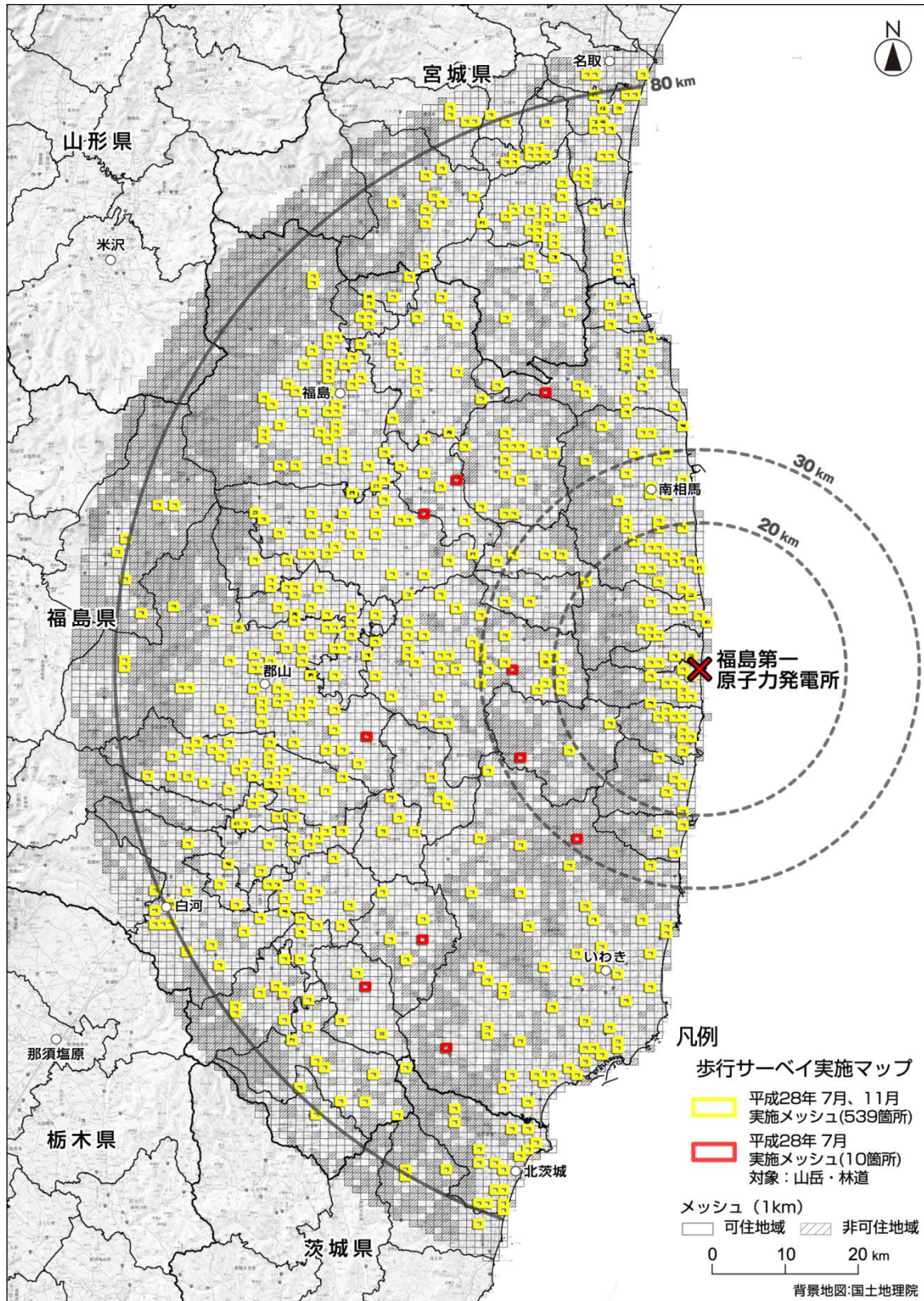


図-1 平成28年度調査における歩行サーベイによる空間線量率の測定箇所(メッシュ)
(赤枠は非可住区域の測定箇所(メッシュ))



図-2 歩行サーベイ測定の様子

空間線量率の合計値

歩行	走行	歩行/走行
55,116	47,093	1.17

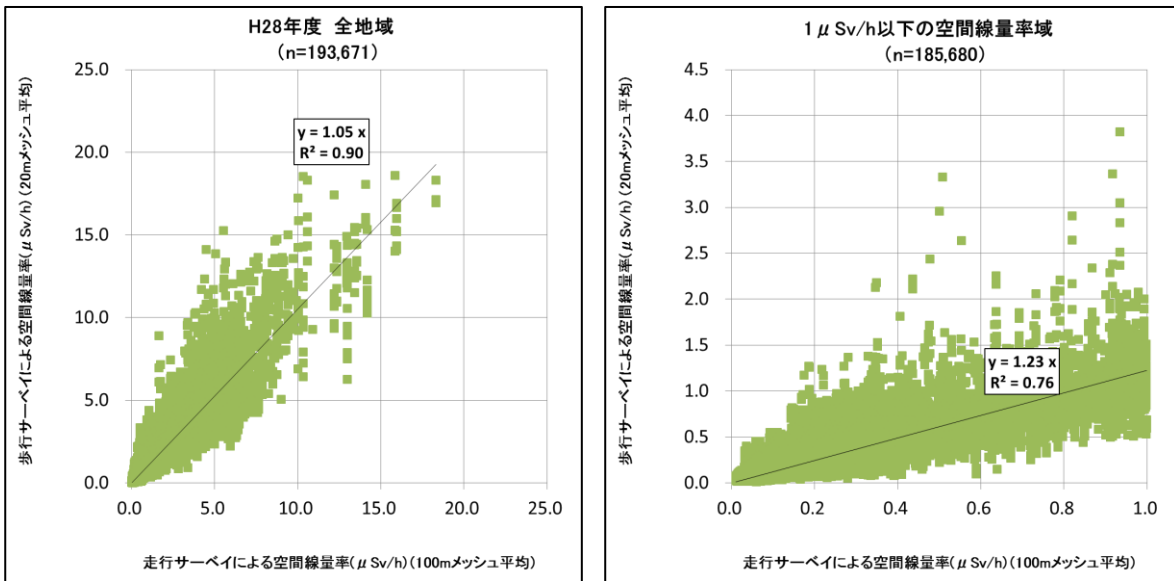
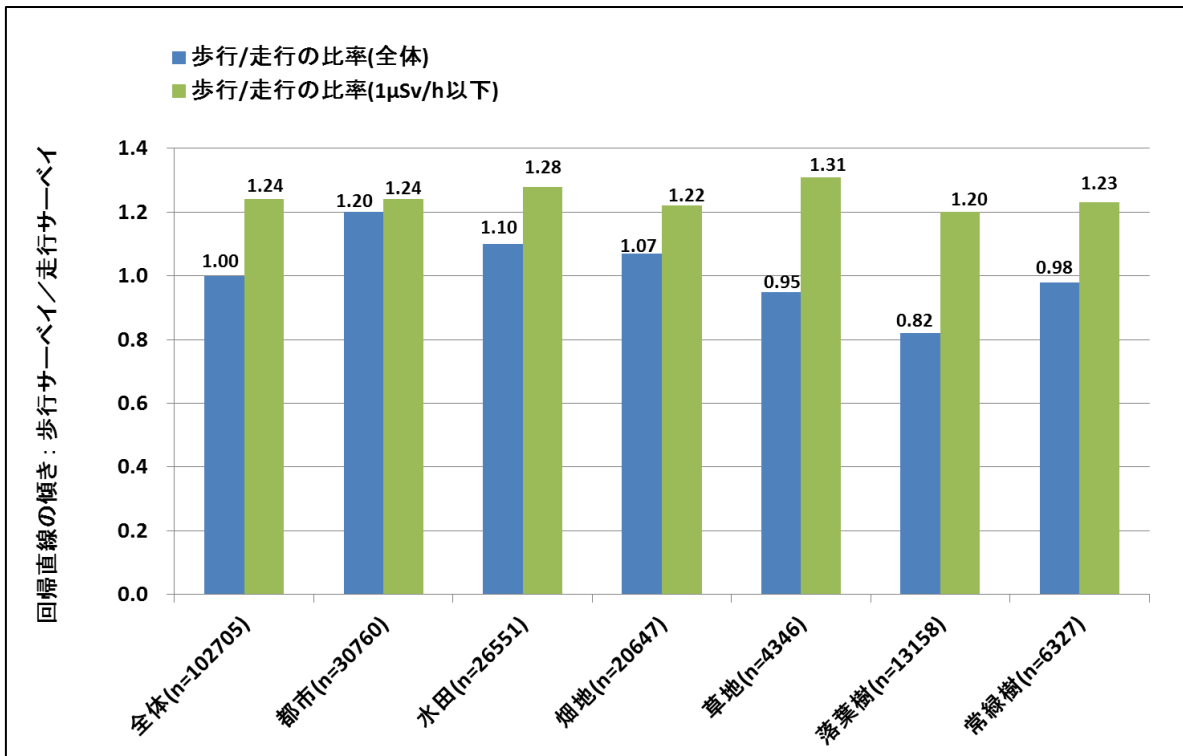


図-3 空間線量率測定結果の比較：歩行サーベイと走行サーベイ (全期間・全地域)

【前期調査】



【後期調査】

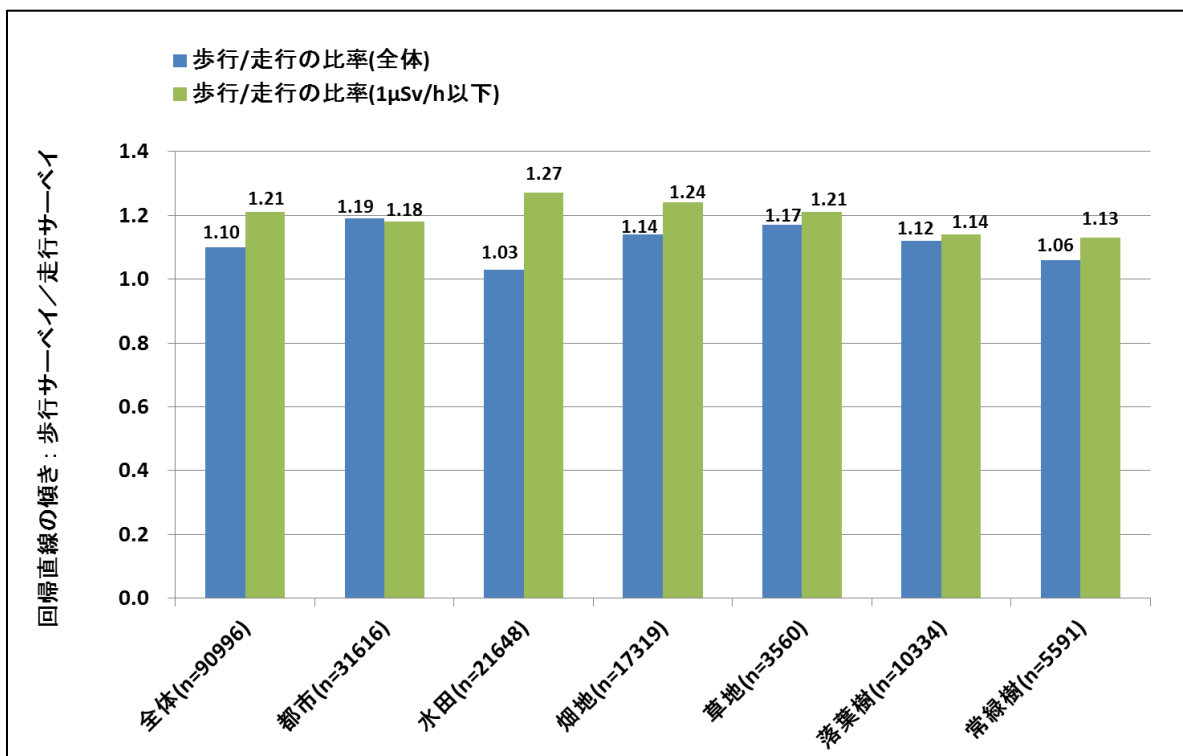


図-4 土地利用状況ごとの回帰直線の傾き（歩行サーベイ／走行サーベイ）

空間線量率の合計値

歩行	定点	歩行/定点
286.7	401.6	0.71

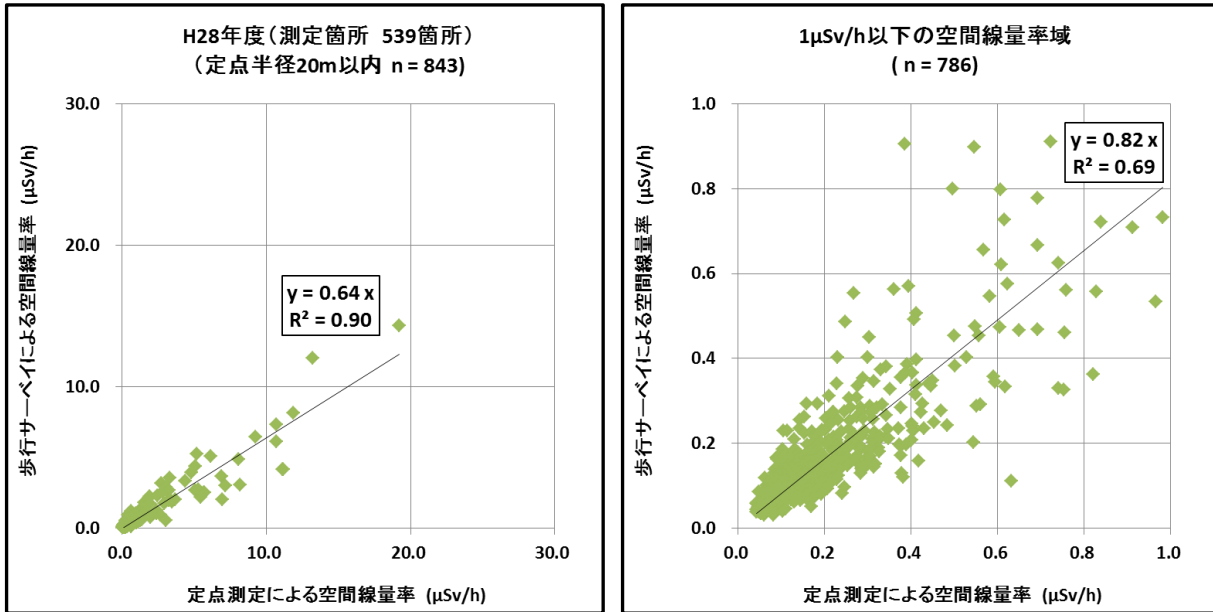


図-5 空間線量率測定結果の比較：歩行サーベイと定点測定
(定点測定から半径 20 m 以内)

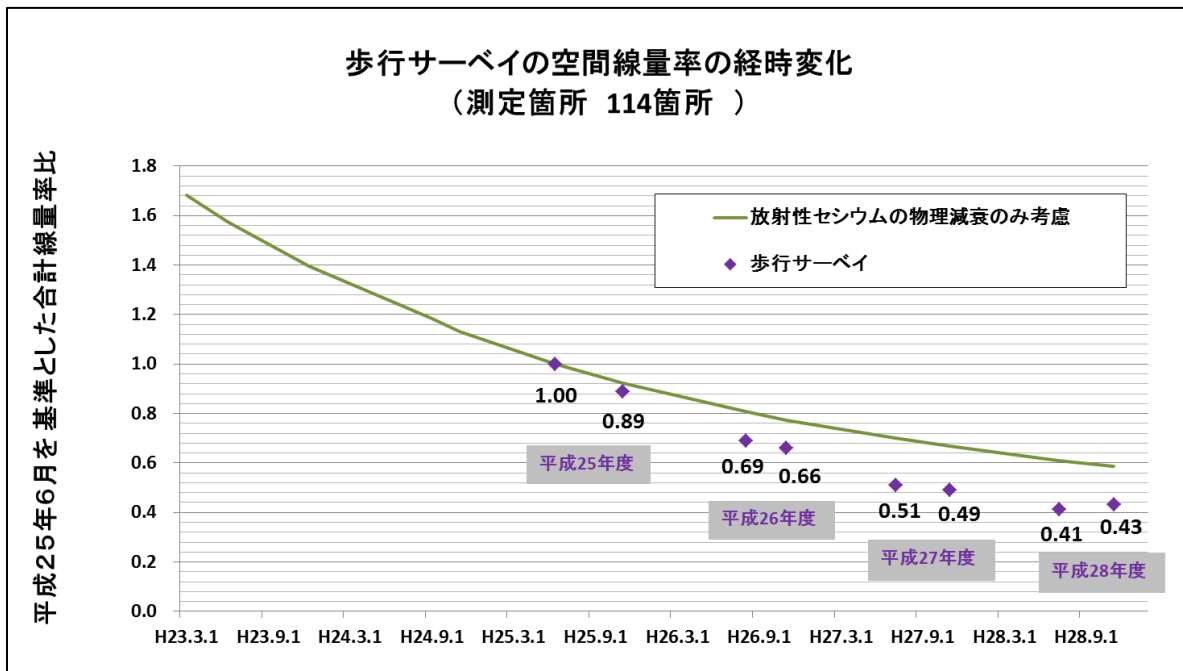


図-6 歩行サーベイの合計線量率の経時変化